2020（令和2）年度入学試験問題

小論文論題

推薦入試【1期】

鶴見大学短期大学部 保育科

試験時間：60分間

字数：600字以内

幼稚園での場面です。3歳児Aくんが、お片付けの時間になっても熱心に絵を描いています。「お片付けが終わったら、お外に遊びに行きましょうね。」と、担任が皆に声をかけて片付けを促しますが、Aくんは、お外で遊ぼうという担任からの誘いも無視して、夢中で絵を描いています。

そこであなたなら、Aくんにどのような声をかけますか？ 文章内で下線を引いた所をヒントに、その理由も含めて600字以内で述べて下さい。

1

2020（令和2）年度入学試験問題

小論文論題

推薦入試【2期】

鶴見大学短期大学部 保育科

試験時間：60分間

字数：600字以内

周りの人から叱られたりほめられたりして育てられた人の中には、「叱られるから叱られるような行動はしない。」あるいは「ほめられたいからそのような行動をする。」という人がいます。その人達は、行動の基準として「叱られるからやらない。」あるいは「ほめられたいからやる。」ということがあるかもしれません。

では、このような考え方について、あなたの経験を振り返りながら、600字以内であなたの考えを述べなさい。

1

2020（令和2）年度入学試験問題

小論文論題

推薦入試【1期】

鶴見大学短期大学部 歯科衛生科

試験時間：60分間

字数：600字以内

「歯科衛生士に必要な能力」について

600字以内で書きなさい。

2020（令和2）年度入学試験問題

小論文論題

推薦入試【2期】

鶴見大学短期大学部 歯科衛生科

試験時間：60分間

字数：600字以内

「現代社会における歯科衛生士の役割」について

600字以内で書きなさい。

2020 (令和2)年度入学試験問題

国語

〔試験入学試験〕
〔新入生特待奨学生選抜試験〕
(2学科共通)

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てもいいけません。
2. この冊子の問題部分は、全部で6ページあります。
3. 解答用紙の所定の欄に、志望学科名・受験番号・氏名を忘れずに記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて、試験監督者に知らせること。
6. 試験時間は60分間です。
7. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
8. 試験終了後、解答用紙は問題冊子の上に伏せて置くこと。
9. この問題冊子は持ち帰らないこと。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

国木田独歩が明治三十一年一月の「国民之友」誌上に『武蔵野』を書いた時、題は「今の武蔵野」となっていた。そのころ彼は、東京の郊外上流谷村に異取二とともに住んでいたが、これは今の渋谷駅から少し西北へ行った丘の陰であった。現在の渋谷谷から、当時の渋谷村の田園風景を想像するのは出来ない。

そのころ独歩は新しく、たびたび独歩の家を訪れた柳田国男は、彼が「閑さへあれは東京と反対の方向へばかり散歩をして居た」と書いていた。独歩は仲間では有名な話上手で、その散歩の話を話しては友人たちを感動させ、皆を武蔵野好きにさせた。いわゆる武蔵野趣味は、次第にその面影の消え失せて来た今日まで、ずっと続いているが、その皮切りは独歩であり、その記念的作品がこの『武蔵野』の一篇である。だが、この作品は、そのような武蔵野趣味の元祖であるより、もっと大きな思想的意味を持っている。A「これは、これまでの日本人が誰も気づかなかつた、新しい自然の発見であった。」

彼は政治青年であった頃から、大自然の奥深さに素直に驚く心を持ち、それが自然詩人ワーズワースへの傾倒となった。人間は如何に生きるべきかと問う、その本質の追求によってカントクシの理想を詩文に現すことを、文学者の使命とした。明治二十六年、七年、彼が九州佐伯の美しい自然の中にあつたころは、彼のワーズワース熱の頂点であつた。彼に有名な「山林に自由存す」という詩があるが、彼が「山林の自由」と相対せしめたものは、人の世の「虚栄の塗」である。彼が恋人佐々城信子と二人で、北海道の空知川の岸辺へ移住しようとしたのも、彼の自由自然を求める熱烈な欲求によつてもたらされた。この恋愛は破局に終り、その傷ついた心抱いて、二十九年九月、彼は武蔵野の一角に移り住んだ。

彼を武蔵野の自然の美しさに開眼させたのは、ツルゲーネフであつた。より正確に言えば、「二葉亭四迷が訳した彼の『猿人日記』の一篇『あひまき』であつた。ワーズワースは彼に自然に托して、『I』を教えたが、『二葉亭ワルゲーネフは自然の美しさ、より具体的・直截的に教えた。二葉亭が『あひまき』や『めぐりあひ』を訳したのは明治二十一年だが、その本当の影響は十年経つてようやく現れたのだ。」

独歩は「あひまき」の冒頭と結末とを、やや長文ながら、作中に引用している。それはロシアの片田舎の秋九月中旬ごろの柳の林の中の描写である。木の葉が頭上でそよぐと、それはようやく聞き取れるかどうかというほどの「しめやかな私語の音」を作り出す。その上葉は忍ぶように梢を伝ひ、空を照らすたびたび林の中の様子はずんずん移り変つた。あたり一面がむらむらと薄暗になると、小雨が忍びやかに降つて来た。柳の葉はすべて赤くも緑くも色づいて、雨に濡れた枝を照れる日の光に、きらきらと光っていた。

このような落葉林の描写の妙味が、いま武蔵野の落葉林を歩いてみて、彼に初めて分つたのだ。白樺と樺と、樹種は違つて、同じく黄葉も、落葉し、時間がささやき、木枯しが点では、同じである。十月下旬、空気は温みたり、物の音も鮮やかに響く。深い雨は幽森である。人跡絶えた北海道の深林では、時雨の趣はさらに深い。武蔵野の時雨の人のなつかしさ、ささやくような趣はない、と彼は言う。晩秋、初冬の武蔵野の雑木林で、風や雨や落葉の立てる微かな物音に、「自然の静寂を感じ、永遠の呼吸を感ずる」という、この「永遠の呼吸」といふところに、独歩の自然観の真骨頂があつた。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

間六 武蔵野の自然と空知川の自然の違いについての筆者の考えを「人間の生活」の語句を用いて、五十文字以内(句読点を含む)で記せ。

間七 次の1〜5について、本文の趣旨に合致するものをAを、合致しないものをBを記せ。

- 1 国木田独歩の『武蔵野』という作品の主題には、江戸期の文人の繁栄を根拠に置いた美意識が見られる。
- 2 独歩が閑さへあれは東京と反対の方向へばかり散歩をしていったのは、松や杉など有用な木材を探したためであつた。
- 3 独歩が好んだ武蔵野の自然は、自然のもつ恐ろしさを実感できるからであり、そこに彼の文学の出来があつた。
- 4 独歩は武蔵野に人懐かしさを覚え、自然と生活を配合して形づくられた景色から創作上の刺激を受けている。
- 5 独歩が武蔵野の自然につよく惹かれた動機には、ワーズワースの文学や印象派の絵画に親しんだ体験がある。

間八 次の方角を記し、前後の文脈を踏まえて、適切な漢字を記せ。

私は阪神間、つまり東を大阪と神戸と、南北を海と山に囲まれたところに生れ育つた。こういう地形感覚は、いまでも根深く残っている。つまり、なにかに囲まれていないし心理的に安定しないのである。閑東と閑西の対向意識もあるが、そういう地形感覚とは性質のものである。A「私はすぐ傍の大野」という都市は隣りにあつていて、さびつたりつめいなし、京都は内陸的で海という出口がないから好きではない。むしろこれは好きな問題であつて、価値の問題ではない。

もしそうする余裕があるならば、ひとは移住するとき、前と近似的な場所を選ぶ傾向がある。谷崎潤一郎の関西移住もその一例かもしれない。震災で旧江戸の街並が破壊されたとき、彼はむしろ関西の都市に江戸を感じたのである。重要なのは、この作家が本能的に心理的安定感を確保しようとした点だろう。この観点から私は驚かざるをえない。彼が例外的に持続した作家だった理由の一つは、無敵なIを節約することに對してかくも鋭敏だったという点にある。

古代人の移住にも同じようなIIが働いたに違いない。邪馬台国論争をみてみると、誰も各所に同じ地名を残している地名をまことしやかな論拠にしているが、なぜ各所に同じ地名が残っているのかという問題に私は関心がある。たぶん移住者は似たような地形を選び、それらに元居たところと同じ地名を与えた。B「それによつてよそよそしい自然を人間のなカルチャーの下に包みこんだのである。人間にとつて『場所』はきわめて重要な問題である。」

『場所』を書いた小説は非常に少ない。むしろスタンダールの『赤と黒』の冒頭の遠大な描写のように、あるいはおそれおそれ意識した大岡昇平の『武蔵野夫人』のように、場所や地形を明確に描いた作品がないわけではない。しかし、ここで私がいう『場所』はそ

- い感受性で感じ取つてきた。自然を愛し、自然とウロウロして生きて来たはずの日本人が、上高地や軽井沢その他の高原地帯の白樺や落葉松の林の美しさを知つたのは、ウエストンその他の外国人に教えられてである。「白樺」という名の雑誌が創られたのも、あちらの印象派の絵画などに親しんだ青年たちによつてであつた。
- そのような自然を見る眼の変革が、「二葉亭や独歩など」によつて、ジョージに準備されて来たことを知る事が出来る。B「それは単に見方を感じ方の変革ではなかつた。いや、感受性の変革が、そのままだらな風景美観を否定して、独歩は如何に生きるかという問いを根拠に置いて、本源的にIIに問いかけているのだ。」
- この『武蔵野』の中に登場して、三年ほど前の夏に武蔵野を歩いた「或友」は、たぶん柳田国男の若き日の姿であつた。彼は、独歩が、家や十町も出てみれば、古今集や太平記の中の武蔵野が横たわつていようによく話したが、後になって見ると、彼はやはり享保・元文の江戸人の武蔵野観の伝統を帯びていて、と書いている(『豆の葉と太鼓』所収「武蔵野の昔」)。
- 独歩が愛した雑木林なども、実は昔の武蔵野の残影ではなく、江戸の燃料の薪山としての、近世の人間作であつた、と論は言う。このような半自然、あるいは準自然であつたからこそ、空知川岸辺のおそろしい原始林と違って、優しく人懐かしかつたのである。実は独歩も、このような「二種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る境地」に、詩興を喚び起されたのである。
- (山本健吉「自然観の変革」 講談社刊『山本健吉全集』による)
- 注1 柳田国男：民俗学者。著作に『遠野物語』など。「熊」は高齢者にける敬称。
- 注2 ワーズワース：イギリスのロマン主義詩人。
- 注3 ツルゲーネフ：ロシアの小説家。著作に『猿人日記』など。
- 注4 ウェストン：イギリスの登山家。著作に『日本アルプスの登山と探検』など。
- 注5 硯友社：明治十八年に尾崎紅葉・山田美紗らが結成した文学上の結社。
- 注6 十町：「町」は距離の単位。一町は約一〇九メートル。
- 注7 享保・元文：江戸時代の年号。享保は一七二六〜一七三六、元文は一七三六〜一七四一。
- 間一 傍線1〜5の漢字の読みを平仮名で記せ。
- 間二 傍線ア〜ウのカタカナ部分の漢字「字」と同一の漢字「字」を使うのを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 ジョギョウが巧みだ 2 ユウフクな家庭に育つた人
- 3 彼はジョウクがある 4 車はジョウヨウする必要がある
- 5 資金のユウシを受ける 6 庭にジョウヨウ利をまく
- 間三 試験で大量にトクテンした
- 間四 空欄A・Bに入る適当な語句を次の中から選び、番号で記せ。
- 1 もろろん 2 だが 3 一方
- 4 いわば 5 たとえば
- 間五 波線部「真骨頂」の言葉の意味の説明をして適当なものを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 その人物が進化したと思われる姿
- 2 その人物が象徴性を帯びた姿
- 3 その人物が本来もつていた姿
- 4 その人物の内部に隠された能力
- 5 その人物に備わつた仮説
- 間六 空欄I・IIに入る適当な一語を、それぞれ本文中より抜き出して記せ。

5

ういものとはちがつて、つまり、眼にみえるようなものではなくて、エドワード・ホールのいう「かくれた次元」としての場所である。人間のかくれた存在構造としての場所である。

古井由吉の『街道の端』（新編四十七年二月号）は、いわばこの意味での場所をみつめたという点でユニークな作品だった。古井氏が造反教師のその後というような問題に関心をもち、もつこの『場所と人間』という問題に集中していったらば、この作品は発見にみちみちたものとなりえたかもしれない。

私は子供のころ、あるテリトリーの外に出るのが怖かった。今から思えばとるに足らない地域まで歩いて行くのが大冒険だったわけである。怖かった理由は二つに分けて考えられる。一つは、共同体の外に出るということへの恐怖からくる。これはまったく幻想的なものである。

もう一つは、もつと感性的なものである。たとえば、私は東京で計六回引越したが、どの土地も住んだ家の周囲敷言メートルにかなじみがない。それより先はよくわからない。むろん地図をみればわかるし、頭ではわかっている。C その二つはすこも実質的に結びつかない。歩いたことがなければ、場所を実質的に感じることができないのである。結局私が知っている場所は、いわば数多くの小さい円から成っていて、その間には何のつながりもない。不思議なことに、これらの円の規模は子供時代のそれとあまり変わらないのである。小さくもなければ大きくもない。このことは親しい交際範囲についてもいえる。円の数は増えても、円の大きさはほぼ一定しているからである。

これは、ホーリが動物学的に「社会距離」とよんでいるものに近い。人間の場合、最大限大人の足で夜明けから夕暮れまでに往還しようとする距離だろう。しかし、人間におけるのはこういう感性的な、生きた空間だけではない、先に述べた幻想的に区切られた空間の方

が支配的である。

今は知らぬが、私が小学生のころは校長室が怖かった。その場所が危いからではなく、それが学校という、共同の幻覚（柳田國男）によって区切られたタブーの場所だったからである。おそらく、こいつた幻想的な空間が確立されることはないだろう。たんにかたちを変えるだけだろう。中学生になれば、やはり校長室を馬鹿にするが、やはりまた別の何かで恐怖するようには、いたる所にこういう幻想的な空間がある。

D われわれは生きた感性的な空間と、さらに共同体や国家のような幻想的な空間とを構えている。ところで、第三の空間がある。それは均質でつべりといひらぐた空間である。地図のような空間だといってもよい。要するに感性的にも幻想的にも区切られていないで、密度も濃度も均等な空間なのである。たとえば、柳田國男は、登山客が地元民にとってはタブーの地を平坦と通過することを例にあげている。登山客にそういふ空間をみえないう。なぜなら、現代版の「登山」が成立したのは、もともと均質、均等な空間が成立したとき以来だからである。

直観的にいえば、われわれが新聞やテレビで知ることような場所や事件はこういう空間に属しているように思われる。それは近所で見聞する事柄のようなリアリティをもたないし、肉眼で見ようとする気も感もない。その上、それは妙に国際的である。沖縄、ベトナム、ピアラ、テルアビブ……これら各地で起っていることにわれわれは均質な関心を寄せることができる。なぜなら、それは均質な空間で起っているからである。

こういう空間は、先だあげた二種の空間からみれば、またたく擬似的なもので、何の実質ももっていない。新幹線が東京から大阪へ行く「旅」のようなものだ。ここでは経験というものが区別しないうが、ない。擬似経験があるだけである。

- 間一 傍線部1の5の漢字で誤っている一字をそれぞれ訂正して記せ。
- 間二 空欄AとEに入る適当な語を次の中から選び、番号で記せ。
- 1 だから
 - 2 たとえ
 - 3 つまり
 - 4 だが
 - 5 しかも
- 間三 空欄Iに入る適当な語を次の中から選び、番号で記せ。
- 1 出費
 - 2 不安定感
 - 3 時間
 - 4 努力
 - 5 地形感覚
- 間四 空欄IIに入る適当な語を文中から探して記せ。
- 間五 空欄IIIに入る適当な語句を次の中から選び、番号で記せ。
- 1 視たものだけを視た
 - 2 意味のあるものだけを認める
 - 3 空間の均質性を否定する
 - 4 擬似経験を繰り返す
 - 5 大事件をテレビでみる
- 傍線部a「関西の都市に江戸を感じた」の説明として適当なものを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 関東に対する競争意識を関西に見出した、ということ。
 - 2 破壊された江戸の街に住み続けることに恐怖を感じた、ということ。
 - 3 江戸の地名と同じ場所を関西に見出した、ということ。
 - 4 江戸の古い町並みと同様のものを関西に見出した、ということ。
 - 5 江戸時代からの伝統の名残を関西に見出した、ということ。
- 傍線部b「共同の幻覚」によって区切られたタブーの場所の説明として適当なものを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 現実存在しないが、人々があると思っているような場所。
 - 2 実際の危険は何もないのに、入ることが許されないという共通理解ができている場所。
 - 3 人々の約束によって権威が付与されていると認識されている場所。
 - 4 壁などの物理的な区切りがないのに、心理的に近づくことができない場所。
 - 5 目には見えないが、実質的には存在しているような場所。
- 傍線部c「そんなものは実は知っても知らなくてもどうでもいいことなのである」と言える理由として適当なものを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 知ったそばから忘れてしまうような価値のない事だから。安全でも危険でもない、自分には全く無関係の事だから。
 - 2 何らかの意味づけをすることができないから。
 - 3 均質な空間の成立と深く関係しているから。
 - 4 擬似的な体験であり、真に対象を知ることができないから。次の1と5について、本文の趣旨に合致するものにはAを、合致しないものにはBを記せ。
 - 1 ひとは住まいを決めるときには、地域や知名度よりも地形感覚が変わらないことを無意識のうちにも重視する。
 - 2 筆者は場所や地形の明確な描写がある文学作品を評述している。
 - 3 感性的な場所を表す円の大きさが変わらないのは、ひとが歩いて行ける距離が大人になってもそれほど変わらないからである。
 - 4 災害などで立ち入り禁止になっている場所も、筆者のいう「幻想的な空間」である。
 - 5 経験したことの無い事象に説明を加えわかりやすくしたものが「知識」や「文学」である。

7

6

われわれは多くのことを知らされ、また知ったような気になっている。しかし、そんなものは実は知ってもしらなくともどうもいことなのである。われわれは大事件をテレビでみる。が、すぐ忘れてしまし、忘れてしましても当然である。テレビには、感性的な空間におけるような経験がなく、擬似的な経験しか与えないからだ。また、この種の知識は安全でもなければ危険でもない。もともと抽象的なものだからであり、均質な世界地図の上で起っているにすぎないからである。

私は「人間」について多くのことを知っている。しかし、私が実際に知っているのは数えられるほどの少数の人間である。E

彼らを本当知っているかといえは疑わしい。「人間」に関するどんな利権も、これらの生きた他者を説明できはしない。そして、これらの生きた他者を見ずして、私は「人間」について何を知ることができるだろうか。

われわれは日々多くのことを経験しているが、そのほとんどはたんに経験したような気になっているにすぎないので、だからこそ意味づけが正急に要求される。事件が不可解だからではない。意味づけることで、もつともしさを確信したいからにすぎない。III

ということのほかに、どうしてわれわれは真に「知識」をもつことができるだろうか。そこから出発するほかに、どうして「文学」が可能だろうか。

(柄谷行人「場所と経験」・「意味」という書」講談社刊による)

- 注1 かくれた次元：アメリカの文化人類学者エドワード・T・ホールが提唱した、動物が無意識のうちに持っている距離の保ち方。
- 注2 柳田國男：注1参照

6

国語

一

1	問一	みようみ
2		しぐれ
3	問二	おもむき
4		せいしゆく
5		しきよう

ア	問三	4
イ		2

ウ	問四	3
エ		4

オ	問五	7
カ		5

キ	問六	I	理想
ク		II	自然

1	問七	武蔵野の自然
2		自然
3		自然
4		自然
5		自然

1	問八	自然
2		自然
3		自然
4		自然
5		自然

1	問九	自然
2		自然
3		自然
4		自然
5		自然

二

1	問一	抗
2		扇
3		還
4		理
5		性

A	問二	2
B		3
C		4
D		1
E		5

1	問三	本能
2		本能
3		本能
4		本能
5		本能

1	問四	3
2		5

1	問五	4
2		5

1	問六	2
2		3
3		5

1	問七	3
2		5

1	問八	5
2		1

1	問九	4
2		3
3		5